

## 大学生のグラフィティ文化に対する意識

菅野真生

デジタルメディアの発展やソーシャルメディアの普及によりグラフィティに対する市民の意識は変化していると考えられる。小林(2003)の研究では、都市における落書きと周辺環境との適合性に関する研究が行われた。落書きする側やされる側の当事者の立場ではなく、歩行中にそれらを見る第三者の立場で評価する「写真評価実験」が行われた。そこでは、「絵としての印象が良い落書きの方が許容されやすい」・「住宅地や整備された場所にあるよりも、殺風景な場所の方が許容されやすい」・「全体的に男性の方が落書きに対する好意的な印象を持つ傾向が、女性は特に暴力的な印象を受ける落書きに対する評価が低くなる傾向がある」ことが分かった。

本研究では 20 年前に行われた小林と同様の調査を行って結果を比較することにより、グラフィティに対する意識の変化の傾向を捉えることを試みた。

調査の結果、「グラフィティは質に関係なく許容されにくいものであったこと」・「住宅地・整備された環境にある落書きと無機質な壁面が続く風景な環境にある落書きを比べても大きな差はみられなかったこと」と、「男女によるグラフィティに対する意見に差がなかったこと」と、これらのことが明らかとなった。

この結果を小林(2003)の結果と比較すると、小林の結果では、「絵としての印象が良い落書きの方が許容されやすい」であったが、20 年前と比較して、絵としての印象がよくても、否定的な意見が強い傾向があった。また、住宅地にある落書きと殺風景な場所にある落書きを比較しても大きな差はみられなかった。また男女差に差はなく、全体的に否定的な意見が多かった。

これらの結果から、大学生は絵の興味が有無関係なく、大学生はグラフィティに対して否定的な意見が多いと考えられる。

新たに得た知見として、絵に対する興味が「ある」・「ない」に関係なく、大学生はグラフィティに対して否定的な意見が多かった。20 年前の結果と比較して否定的な意見が強い傾向があったため、自治体などはより強くライターに対し強い態度で接するなど、防犯対策を強化することが必要だと考えられる。